

# 園のおたより



第 4 号

令和5年7月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

## 本当のねがいごと

園長 関 由起子

7月に入り、5本の大きな笹が遊戯室にやってきました。色紙で作ったたくさん飾りが笹を彩りましたが、一番の楽しみはこどもたちの短冊です。お子さんの“ねがいごと”を保護者の皆様が書き取ってくださりました。Aちゃんは〇〇になりたいのか、Bくんは〇〇が欲しいのね、Cさんはご家庭の〇〇を、Dさんは世界の〇〇を願っているのか、と教職員も楽しく拝見いたしました。

さて、私の娘の場合、短冊は保育園の先生が子どものねがいを書き取ってくださいました。親たちはわが子のねがいを探して短冊を見て回ります。娘が2歳の時です。Aくんはアンパンマン、Bちゃんはプリキュアになりたい、そしてわが子は「どでかい砂場になりたい」でした。砂場？、それもどでかい？、私たち夫婦の頭の中は疑問でいっぱいでした。その後大きな砂場がある公園に連れて行くようになったのですが、砂、大量の蟬の抜け殻と水をバケツに入れてぐるぐる楽しそうにかきまぜていました（親から見るとゾーッとするスープが出来上がりました）。本当に砂場が好きなんだと納得しました。

子どもの本当の気持ちを親が知らない、あるいは勘違いしていることはよくあります。先日、病気のこどもたちへの支援に関する会議の場で、成人した病気だった子どもの一人は「親には本当の気持ちなんて言わないよね」と発言し、一方で親たちは「私たち患者は……」と自分の意見を子どもの意見と一緒にして発言します。研究者としては“親の意見は子どもの気持ちと異なることがある”と注意を払うのですが、親としての自分は子どもの気持ちを先取りしたような気分で行動してしまいます。先日も娘のためにかわいいマスクを特売で買って帰ると、「私のマスク、また勝手に買って！」と怒られました。気に入らなかったようです。

皆さんの中にも短冊を通して思いも寄らなかったお子さんたちのねがいにびっくりした方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これから夏休みです。様々な経験を通してお子さんの何かを新発見してみてもいいのではないでしょうか。



## 絵本のたのしみ

今年は（今年も？）、暑い夏が始まりました。なかなか明けない梅雨と重なってなのか、湿気も加わり、体が暑さに追いつかない日もあります。7月に入り、熱中症に関する警戒指数が高い日が多く、幼稚園でも水遊び以外は、室内で過ごすことが多くなっています。

室内でゆったり体を休めながら過ごす際に、「絵本」は魅力的な環境の一つです。幼少期に出会った絵本を大切に覚えていて、大人になってから手に取ってみたい、子どもたちに読んであげたりすることもあるかと思います。私も、子ども時代に好きだった絵本のほか、大人になってから（幼児教育を学んだり、幼稚園で働き始めたりしてから）新たに出会って、大切にしている絵本がたくさんあります。好きな絵本やお薦めの絵本などについて尋ねていただくこともあるのですが、今回は2冊を紹介したいと思います。

1冊目は、佐野洋子さんの『100万回生きたねこ』（講談社、1978年）です。とても人気の絵本ですので、ご存じの方も多いかと思います。お話の前半は、主人公のねこが、何度も生きていく（生き直していく）のですが、その一つ一つの場面が、文と絵でとても豊かに表現されています。後半は、ある相手との出会いと関係性によって生じる、ねこの細やかな気持ちの変化が、丁寧に表現されています。5歳児の担任になった時には、必ず一度、この絵本をクラスみんなに読む機会をもつことにしていました。読み手も聞き手も、いろいろなことをそれぞれに感じられる絵本ですので、どのタイミングでいつ読み聞かせるか、とても意識して選んでいたように思います。

2冊目は、ガブリエル バンサンさんの『アンジュール：ある犬の物語』（ブックローン出版、1986年）です。この絵本には文章がなく、文字通り、絵だけで構成された「絵本」です。しかも鉛筆によるデッサン画のような表現ですので、少しお話を捉えていくことが難しい絵本かも知れません。それでも、そのようなとても洗練された表現であるからこそ、一つ一つのページを丁寧にめくり進んでいくことで、「ある犬」の物語が、くっきりと語られているように見えてきます。「絵本」が子ども時代のためだけのものではないことを、この絵本を通じて知ることができました。

長く読み継がれてきた作品、斬新な表現で新たに創られた作品など、まだまだ素敵な絵本はたくさんあります。また、同じ絵本であっても、何度も読んでみることで、その度に新しい感じ方、出会い方をすることがあります。これから暑い夏が続きますが、時には、絵本や物語にふれる時間をとりながら、その作品の世界を味わってみたいと思います。

どうぞ、健康に十分に留意しながら、よい夏休みを過ごしてください。

**（副園長）**



## 1くみ

### 「水と土と空」

季節を一つ飛び越したような暑さの続くこの頃です。水遊びが始まってから子どもたちは空模様がとても気になるようです。幼稚園で初めての水遊び。初日はあいにくの小雨でしたが、それでも蒸し暑さの中で、涼しさを感じることができたひと時でした。水遊びと一口に言っても、パシヤパシヤと水を掛け合ったり、貝殻型のおもちゃや水鉄砲などを使ったりするなど様々な遊び方があります。プールの淵にうつ伏せに体を載せて、足をプカプカと浮かべている人もいました。日差しが強い日が多くありましたが、暑い空と冷たい水の間で本当に心地よさそうでした。

過ごしやすい気候の日には、戸外に出て園庭のいろいろな自然に触れることもしました。今年は暑い日が続いてなかなか出会う機会がなかったダンゴムシも、7月に入ってたくさん見かけるようになりました。中でも普段ベンチが置いてあり日陰になっている1組の砂場の近くにはダンゴムシが家を作っていたようで、たくさんいることを2組の人が教えてくれました。少しの間入れ物に入れてじっくり見させてもらうと、背中にいろいろな模様があったり、お腹にたくさん足が生えていたりすることに気が付く人がいました。直に見て、触れることで、色々な気付きがあります。次の日の降園前にはみんなで「だんごむしのころちゃん」の紙芝居を見ました。本物を見た後だったのでお話の世界により一層引き込まれたようです。

草木が緑の葉をいっぱいにつけ、いろいろな生き物が土から顔を出し、さらに水に触れるのも心地よい、子どもたちにとって魅力がいっぱいの季節です。夏バテや熱中症に気を付けて楽しい夏を過ごし、2学期に会えることを心待ちにしています。





## 2くみ

### 「夏の不思議」

連日、真夏のような暑さが続く中でも「暑くてこんなに汗かいちゃった」と、登園後にとっても楽しそうに話してくれる姿を見ると、子どもたちにとってはこの暑さも毎日を彩ってくれるものの一つなのだなと思います。

先日、登園すると扉の所で首を傾げながら、室内に入ったり、テラスに出たりを繰り返している人がいました。その表情はまるで「こっち（テラス）は暑いのに、どうしてこっち（室内）は涼しいんだろう？」と言っているようでした。私たちに何か聞く訳ではなく、自分の肌でその不思議なことを確かめられると、とても満足したように普段の生活に戻っていました。“冷房をつけているから涼しい”という当たり前に思えることの中にも、子どもの目に映る世界にはたくさんの“不思議”が隠れていて、それを自分で見つけて、触れることに楽しさがあるのだと思います。

夏が近づくにつれ、花壇に咲いているオシロイバナも花を咲かせ始め、2組ではテラスの日陰を使って色水遊びが始まりました。「冷たい」と、袋に入れた水の心地よさを感じる人、オシロイバナを一つずつ指で潰して、少しずつ変化する水の様子をじっと観察する人、「こっちの方が紫になった」と、オシロイバナの量によって水の色が異なることに気付く人など、同じ遊びの中でもいろいろな“不思議”が見つかりました。そして、誰かが見つけた“不思議”は、友達の言葉を介したり、真似してやってみたりすることで友達にも広がっていきました。

私たちの周りにはたくさんの不思議なことが隠れています。それを子どもたちと一緒に見つけたり、不思議に思ったりしながら、一人一人が抱く思いを大切に2学期以降の生活も支えていきたいと思っています。

1学期はたくさんのご協力ありがとうございました。9月に元気なみんなに会えるのを楽しみにしています。暑さが厳しくなっていますが、長い夏休みもどうぞ元気にお過ごしください。



### 3くみ

#### 「豊かな恵みから」

自然観察園でたわわに実った梅で、梅ジュースや梅ゼリー、梅干しを作りました。おうちのお兄さんや、おばあさん、お母さんから教えてもらった作り方で試しました。自然の恵みを大切にすることや、季節の物をいただいて生活とつなぐことを、伝達してもらう素晴らしさを味わいながら、自分たちの生活と結びつけて楽しみました。梅を収穫したこと、香りを確かめたこと、持った時の感触や重さを感じたこと、数えたこと、重さを測ったこと…やってみたいという気持ちがいろいろなことを感じたり考えたりするきっかけになりました。それぞれ砂糖、塩に漬けて瓶に入っていますが、ただ待つだけではありません。氷砂糖が梅によくまわるように、容器を毎日回しながら「おいしくなあれ」と魔法をかけたり、梅が日ごとにしわしわになって、エキスが出ている様子を不思議がったりしました。子どもたちの「おいしくなあれ」の言葉や思いは、梅にも届いているように思うくらい、大切に大切に毎日を過ごしていたのでした。

ある日のこと、梅を漬けようと、用務員さんに瓶を貸してもらい、3組さんがテラスを歩いていると、2組さんが「何しているの?」と尋ねました。「これから梅ジュースを作るんだよ」と応えました。それから毎日「3組さん、梅ジュースは出来た?」とお部屋に尋ねてくれました。3組さんは「毎日聴きに來てるね」と嬉しそうでした。しばらくすると、それほど楽しみにしている人が3組以外にもいることに気付き、「完成は、まあだよ」「30日かかるんだよ」と応えるだけではなく、どのように伝えようかと考えるようになりました。そして、漬けた日から30日後はいつなのかを数えるために、カレンダーを作ることになりました。その中で、自然と小さい組の友達に飲ませてあげたいという思いは3組に広がっていきました。

完成は7月19日です。その日は、3組で完成おめでとう会をしました。20日には1組2組さんに振る舞う「梅ジュースパーティー」をしました。友達と計画しながら、いろいろなことに気付き、細やかに相手の立場に立って考えようとしていました。

1つの遊びを語る中には、こちらに書ききれないほどの、子どもたちの豊かな思いがありました。目的に向かうまでの過程を大切にしたいですね。そして、たくさん遊んだね、と大きな心で包んでいきたいです。